

10月報道資料

八千代市

<p>1. 件名（情報）・題名 令和2年度第1回企画展「水に挑む—古川から新川へ—」を開催</p>
<p>2. 内容（目的・日時・場所・特徴など） 八千代市の中央を南北に縦断している新川は、八千代の象徴的な場所です。その新川は江戸時代においては、千葉郡と印旛郡の郡境であるとともに、流域諸村の境でもあり、行政上重要な役割を果たしてきました。そして新川とは別に古い川筋があったことを知る市民は多くはありません。そうした市民に向けて新川の歴史を紹介することで、新川に興味を持っていただく機会とします。 また、新川周辺に伝えられた伝説を紹介することで、市内の歴史及び伝説への関心を高め、地域の理解を深めていただくことを目的に開催します。 (1) 会期 令和2年10月3日(土)～11月23日(月・祝) (2) 会場 八千代市立郷土博物館 企画展示室</p>
<p>3. 過去・現在及び今後の展開 関連行事について (1)フィールドワーク「村絵図みながら新川歩き」～村上村編～ 内容：江戸時代の村上村の様子を伝える村絵図と現在の地図を比較しながら新川沿いを歩き、村絵図上に記された地や伝説が残る場所をめぐる。 日時：11月1日(日) 13:30～15:30 (2)第2回やち博講座「新川の誕生」 内容：古くからあった川筋が、新川へと変わる江戸時代の天保期の様子を中心に、史料に基づいて解説します。 日時：11月8日(日) 13:30～15:00 会場：八千代市立郷土博物館 学習室 (3)展示解説会 日時：10月24日(土)・11月23日(月・祝) 各13:30～(30分程度) 会場：八千代市立郷土博物館 企画展示室</p>
<p>4. 添付資料（要綱・名簿・写真等） 展示の概要とチラシ</p>
<p>5. 主催者 八千代市立郷土博物館</p>
<p>6. 問い合わせ先（住所・電話・担当者等） 八千代市立郷土博物館 八千代市村上1170-2 電話：047-484-9011 FAX：047-482-9041 E-mail：kyoudo@city.yachiyo.chiba.jp 担当：野中政博</p>

「水に挑む—古川から新川へ—」

展示の概要

はじめに

八千代市の中央を南北に縦断して流れる「新川」は、神崎川、桑納川などと合流する市内で最も大きな河川であるとともに、八千代を象徴する自然です。正式には「印旛放水路」といいますが、今回の展示では「新川」と表現します。

「新川」という名称は、天保7年(1836)の「米本村絵図」には使われています。

天保7年以前には古い川筋があり、この川筋が千葉郡と印旛郡の郡境、流域諸村の村境を兼ねており、行政上重要な役割を果たしました。しかしこの川筋は細いうえに蛇行していたため、水害をもたらしました。水害を防止するために、江戸時代に3度の新川普請が試みられますが、いずれも失敗に終わり、現在の新川は、昭和30年代の近代工法によるものですが、江戸時代の普請が基礎を築いたといえます。

展示では、古い川筋から新川へと流れを替える様子について、天保7年を境として江戸時代を中心に古代から紹介し、また、新川周辺の村々には伝説が残されていますので、米本と村上地区に伝わる物語をお楽しみいただければと思います。

新川とは

現存する全国の新川

「新川」という名称は全国に86か所以上あります。東京都江戸川区を流れる人工河川の新川は、寛永6年(1629)に、自然の流れであった古川の流路を一部変更して直線化する普請を行ったということで、八千代市の新川と歴史的な背景が似ています。

八千代市の新川

印旛沼と直結し、降雨で増水した時には大和田機場から花見川を経由して東京湾に流し込みます。平均水深は2m程で、平均の川幅は



大和田機場方面を望む

江戸時代の新川は、南(勝田)から北(印旛沼)へ流れていましたが、現在は大和田機場が稼働した時にのみ北から南へ流れます。この流れにするために、江戸時代に3度の堀割普請が行われました。

古川から新川へ

新川以前の古い川筋

古い川筋は自然の流れで、印旛沼と伝説の阿蘇沼を繋ぎ、阿蘇沼から印旛沼に向けて水が流れていたと考えられます。

阿蘇沼近隣に存在した南海道遺跡の堅穴住居跡4棟は、出土遺物などから古墳時代中期(5世紀後半)から奈良時代(8世紀前半)と考えられ、古い川筋に臨んで人々が生活を営んでいました。

遺跡からは、日常品である杯、甕のほか、祭祀に使われた石製の勾玉、剣形品などが出土しています。

中世の古い川筋

『千葉県印旛郡誌』(復刻版)には「阿蘇沼」の項があります。印旛郡村上にあることが紹介され、阿蘇沼が舞台となった「オシドリ伝説」の概要と「沙石集」との関連を指摘しています。

また阿蘇沼が広大で、そこから水が流れて印旛沼に注ぎ、この間を古い川筋が繋いでおり、印旛沼に注ぐ場所に米本城に通じる城橋を架けたとしています。2つの沼を繋いでいたのが、古い川筋で、江戸時代の古川筋と考えられます。

江戸時代の「新川」誕生前

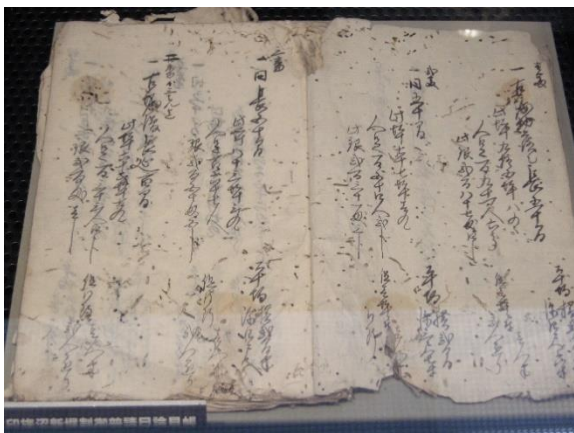
享保9年(1724)8月、印旛沼からの逆流による洪水を防止するため、平戸村の源右衛門が幕府に新田開発を願い出ました。

徳川家康が江戸に入った頃は、利根川と渡良瀬川が平行して南流し、江戸内海(東京湾)へ流れており、江戸には洪水が起きました。そのため家康が利根川の河川付け替え工事を始め、承応3年(1654・将軍家綱)に3度目の赤堀川(茨城県)の増削工事で香取海(銚子河口)に通じる河道が開かれ、利根川東遷は完了しました。しかし利根川の水が増水した時にはすべての水を太平洋に流せず、印旛沼に流れ込むようになり、印旛沼の満水時には逆流して新川に流れ込みました。そして平戸、米本の各村周辺に深刻な水害が引き起こされました。

享保7年7月、江戸日本橋のたもとに徳川吉宗が推進する新田開発の高札が掲示され、開墾すべき土地がある場合は代官らと相談のうえ、町奉行に願い出ることを通達しています。平戸村の源右衛門はこの情報を知り、堀割筋周辺の洪水を防ぐために幕府の新田開発政策を活用することを考え、願い出たと考えられています。

源右衛門の願いは幕府に聞き届けられ、享保期の普請が開始されます。幕府からは資金提供がありましたが、普請を進めるうちに不足するようになり、源右衛門らは資金を融通しますが、多額の負債を抱えたため、中止に追い込まれました。2年間、村人らと掘り続けた普請を諦め、夜逃げも考えたと伝えられています。

享保期の堀割普請から半世紀ほど経過した安永9年(1780)8月から11月までの間に、島



下総国印旛沼新開大積り帳(個人蔵・市指定文化財)

田村名主治郎兵衛らが平戸村から検見川村海辺(千葉市)までの190区画の堀割開削の見積書



田沼意次公御肖像(萬年山勝林寺蔵)

(大積り帳)を3度作成し、代官の宮村高豊に提出しました。

代官からの報告を受けた幕府老中田沼意次は、翌年に普請を開始しました。この普請のために、老中田沼は、大坂の天王寺屋藤八郎と江戸の長谷川新五郎らを金主(資金提供者)として指名します。「入置申一札之事」によれば、金主の長谷川新五郎は、当時、日光中禅寺道(栃木県)の普請も請け負い、借入金や利得金などの支払いをめぐる杉戸宿(埼玉県)の金主と争いになっていたため、島田村治郎兵衛らに仲裁を依頼した人物でした。そうした問題を抱えた金主でも堀割普請の金主に指名されました。



下総国印旛沼御普請堀割絵図(個人蔵・市指定文化財)

商人資本を使って進められた天明期の普請は、現在の新川と花見川を繋げて東京湾に流すことで、洪水を防止することが目的でした。天明期に作成された「下総国印旛沼御普請堀割絵図」で



繋がっていない川筋

は、古い川筋（勝田川）と花見川は繋がって
おらず、約 1.5 km 続く高さ 15m 余の台地を切り
開く必要があり、普請における難所のひとつと
なっていました。

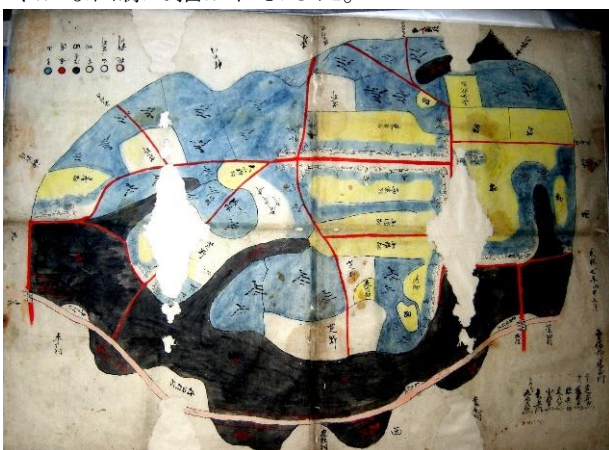
天明 6 年（1786）4 月の「神野村絵図」では、
平戸橋より南が細い線（古い川筋）で描かれて
おり、印旛沼から平戸橋にかけて直線的な川が
描かれていることから、天明期の普請で平戸橋
までは堀割が完成したことをうかがわせます。

天明 2 年に鍬入れ（着工）となりましたが、
翌年の浅間山噴火による影響で川底が浅くなり、
普請は一度中断しました。この間に、村方にお
いて中心的役割を果たしていた島田村名主治郎
兵衛は、勘定奉行配下の岩尾行徳と長沼（成田
市）を視察するなど新田開発に向けて動いてい
ました。噴火後の影響で川底が浅くなったまま
の状況のなか、同 6 年の断続的な降雨が追い打
ちをかけ、関東一円は大洪水に見舞われました。
さらに老中田沼の失脚もあり、普請は中止とな
りました。

新川の誕生と古川の消滅

「新川」誕生と古川筋

「新川」の名称は、天保 7 年（1836）の「米本村
絵図」に、初めて凡例のなかで記載され、ゆる
やかな曲線で描かれました。



米本村絵図（当館蔵・市指定文化財）

天明期の堀割普請が中止されて以降、天保 7
年までの間に普請が行われたことがないため、
「新川」は天明期の普請で開削されたと考えら
れます。この時期には、新川と古川の両川筋が
あり、依然として古川筋が村境や郡境として
存在していました。当時の麦丸・萱田・村上・
大和田村及び萱田町の村絵図には、新川と古川
の川筋が描かれ、所々で合流・分流して併存し

ていたことが窺えます。



下総国千葉郡萱田村絵図
（印西市教育委員会保管 清田家文書）

両川筋が存在するなか、天保期の堀割普請が
幕府老中水野忠邦によって、水運の開発を主目
的として再開されます。



水野忠邦公御肖像（東京都立大学図書館蔵）



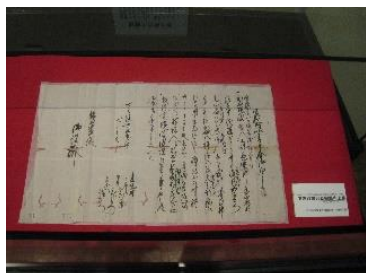
下総国印旛沼堀割五頭堀場絵図面の一部（鶴岡市郷土資
料館寄託・阿部家文書 千葉市立郷土博物館画像提供）

天保 11 年（1840）から印旛沼や堀割筋の調査
を行い、同 14 年に普請を開始しました。老中水
野は堀割普請を五藩の大名に命じ、手伝普請と
して人足や資金を調達させることにしました。

手伝普請の大名は、沼津藩主水野忠武、庄内

藩主酒井忠勝、鳥取藩主池田慶行、貝淵藩主林忠旭、秋月藩主黒田長元が指名され、担当する持ち場が決められました。新川を担当したのは、水野忠武で、5人のなかでは最長の持ち場でした。普請における最大の難所である「高台」は酒井忠勝が、土が崩れやすい「化灯土」の場所は池田慶行が担当しました。

それぞれの藩で苦労したのは、普請人足を集めることでした。国元から呼び寄せた百姓では不足し、黒鋳人足という普請専門の人足を雇い入れました。人足のなかには普請中に病死する者もあり、いかに過酷な労働であったかが窺えます。



乍恐以書付奉御届申上候
(個人蔵)

水野忠武が担当した城橋付近の掘削予定がわかる絵図があり、橋の中心から7間(約12・6m)ずつ広げる予定であったことがわかります。

天保14年7月着工の堀割普請が進められるうちに、膨大な費用を要することがわかった老中水野は、普請規模の縮小と工期短縮を命じます。その最中の閏9月1日、大風雨により現場に土砂などが流れ込み、さらに13日に老中水野が解任され、普請は中止となりました。

新川は未完成でしたが、麦丸村絵図からは天明あるいは天保期に、新川が古川の一部を利用して開削されたことがうかがえます。こうして古川は、現在では消滅していますが、村上地区と大和田、萱田町地区との境などに痕跡は残されています。

近代以後の新川

明治期を迎えても洪水の被害が続出し、明治政府はオランダ人技師ドールンを招聘し、利根川改修工事や水門の完成を目指しましたが、昭和期でも洪水が起きました。昭和21年(1946)に国営印旛沼手賀沼開拓事業が開始され、同38年に農水省から前年発足の水資源開発公団が事業を引き継ぎ、同30年代に新川拡幅工事が行われ、同41年に大和田機場が完成して、現在の新川となりました。

新川増水時には、大和田機場のガスタービン装置を稼働させますが、それはノートパソコン

の操作で行われ、現在の洪水を防ぐ最後の砦となっています。

新川周辺の伝説

印旛沼堀割筋出現怪獣(千葉市横戸町)

天保14年(1843)閏9月2日、弁天山沼堂前に、鼻が低く顔が猿似で、全長が1丈6尺程(480cm余)ある色黒の怪物が現れた際に、見廻役人らが即死したという言い伝え。

乳清水(米本)

お乳のでないお母さんが、赤ちゃんにお乳を飲ませたいという思いで、湧き水に懸命に祈り続けた結果、お乳が出始めたことから、湧き水を「乳清水」と呼ぶようになった伝説。

一空法師の入定窟(村上)

一空法師が疫病から村人を救うために入定窟に入り即身成仏した伝説。



一空法師の入定窟

オシドリ伝説(村上)

村上の正覚院の創建にまつわる伝説で、雄のオシドリを射殺したことを雌のオシドリに教えられ、後悔した真円が、弔うために正覚院を創設したとする物語。

起木の弁天(村上)

大風で倒れた木を弁天様とお供の者が立てて、村人に伐採されるところを助けた物語。

協力者・協力機関等(敬称略)

【機関等】千葉市立郷土博物館

鶴岡市郷土資料館

印西市立

木下交流の杜歴史資料センター

東京都立大学図書館

万年山勝林寺

八千代市教育委員会

【個人】安藤正昭 清田源治 信田 稔

山崎芳明

令和2年度第1回企画展

「水に挑む—古川から新川へ—」

令和2年10月3日発行

編集・発行 八千代市立郷土博物館

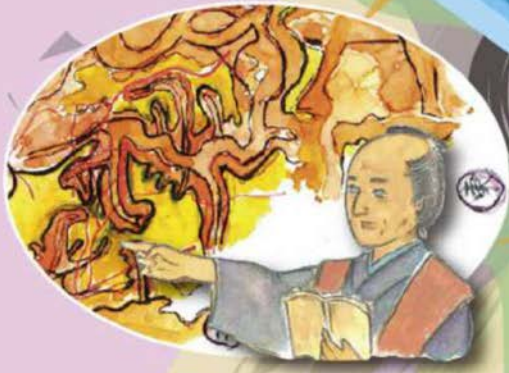
令和二年度 第一回企画展

水に挑む

—高川から新川へ—



平戸村の原右衛門オブジェ



鳥田村の名主 治郎兵衛イラスト



大和田機場

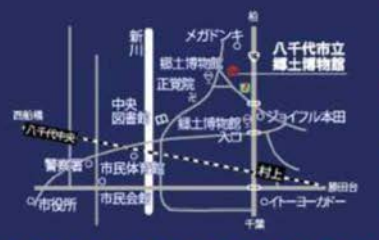
10/3- 土
11/23 月・祝

〒276-0028 八千代市村上 1170-2
休館日：月曜日（但し、国民の祝日・休日の場合は開館、翌平日閉館）
開館時間 9:00～16:30 ☎ 047-484-9011

入館
無料



八千代市立郷土博物館



水に挑む

古川から新川へ

八千代市の中央を南北に縦断している新川は、市内最大規模の河川で、八千代の象徴的な場所でもあります。その新川は江戸時代においては、おおむね千葉郡と印旛郡の郡境であるとともに、流域諸村の境でもあり、行政上重要な役割を果たしてきました。また、新川の川筋となる以前に、古川の川筋が存在したことは、あまり知られていません。そうした歴史を知ること、新川および八千代の地を理解していただければと思います。さらに、新川周辺に残された伝説を紹介します。歴史事実の他に新川にまつわる伝説から、人々のこの地への想いを知っていただければ幸いです。



市指定文化財 下総国印旛沼御普請堀割絵図 (信田家蔵)



田沼意次 (画像)
(豊島区萬年山勝林寺蔵)



水野忠邦 (画像)
(東京都立大学図書館蔵)

I 八千代市の新川とは？

日本全国に新川と称する川は数多ありますが、八千代市の新川は幕府が3回関わって普請を進めようとした経緯があります。そうした八千代市の新川の特徴について解説します。

II 古川から新川へ

古川は新川の元となった川筋で、中世の頃には既に流れていたと考えられています。現在は消滅した阿蘇沼と、現存する印旛沼を結びつけた古川から、幕府老中田沼意次が主導した天明期の普請を経て、新川と称するようになるまでの過程を探ります。

III 新川の誕生と古川の消滅

幕府老中水野忠邦が主導した堀割普請により新川が誕生することで、一時は併存した古川が消滅していくこととなりますが、古川の痕跡は現在も残っています。そうした古川の痕跡及び新川の現在までを紹介します。

IV 新川周辺の伝説

染谷源右衛門(平戸)・乳清水(米本)・一空上人(村上)・おしどり伝説(村上)・起木の弁天(村上)・印旛沼堀割の怪獣など新川周辺の伝説を紹介します。

関連行事

●11/1(日) フィールドワーク

「村絵図みながら新川歩き」
～村上村編～

13:00 博物館ラウンジ集合

13:30～15:30 出発～解散

(雨天時、学習室にて解説会)

講師：館職員

※要予約 先着20名 資料代100円

●11/8(日) 第2回やち博講座

『新川の誕生』

13:30～15:00 学習室

講師：館職員

※要予約 先着40名

●10/24(土)・11/23(月・祝)

展示解説

各回13:30～(30分程度)

企画展示室



印旛沼堀割出現怪獣

おしどり伝説

今後、新型コロナウイルス感染症の状況により変更となる場合がありますので、最新情報は八千代市HPで確認、または博物館までお問い合わせ下さい。